

関連項目：教育活動プラン①

全校であいさつ運動を推進し、自尊感情を育む

目的

本校の児童はさまざまな能力は高いものをもっているが、それを表現することが不得手で自分を低く評価しがちである。そこで、あいさつ運動を核とした学校の自慢づくりに取り組み、さらに自分の自慢や学級の自慢を意識させることで一人一人の自尊感情を高め、自他を大切にしている心情を育むことを目的とする。

内容

● 伝統を引き継ぐあいさつ運動の実践

—「学校の自慢づくり」—

本校では6年生児童会を中心に、毎朝児童があいさつ運動を行っている。正門において、登校してきた児童一人一人に、「おはようございます」とさわやかなあいさつをしている。

『小さな親切運動』の一環としても、継続することの大切さと時間をかけて取り組むことの大切さを身をもって垂範する場としている。

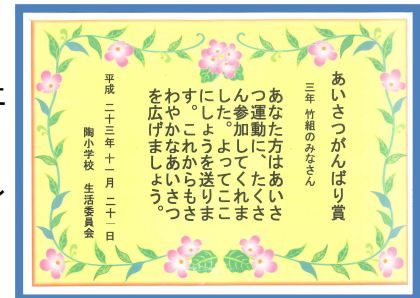
また、校長が雨の日も風の日も毎朝校門に立ち、児童を迎えている。その姿に、児童も元気なあいさつで応える姿が増えてきた。



● 生活委員会による啓発と称賛

生活委員会が中心となり、あいさつ運動に参加するように全校生に呼びかけたり、自ら参加してあいさつ運動を行ったりしている。

また、あいさつ運動をがんばっている学級を毎月全体の場で表彰し称賛することであいさつ運動の輪を広げる一助としている。



● 担当が学級によびかけ —「学級の自慢づくり」—



学級としてのまとまりであいさつ運動に参加し、連帯感、学級の所属感を児童に感じさせる機会としている。

実践の様子や生活委員会からのがんばり賞を教室や廊下に掲示して、「学級の自慢」として児童に意識づけている。

成果

あいさつという行為を通じて、自分を気にかけてくれている、あたたかい心のつながりを感じ、心を開くという感情が芽生え、そのことが元となり、自尊感情を抱く児童が増えている。「自分のために毎朝校長先生や友達が校門で待っていてくれる」と思うことで気持ちが落ち着くという児童もいる。

また、あいさつボランティアに参加している児童は、次第にやりがいを感じるようになり、自己有用感が育ってきている。あいさつされる側・する側それぞれにおいて好循環が生まれている。

学校生活のスタートを気持ちよくはじめられることは非常に大切なことである。目を大きく見開き、大きな声であいさつできる意欲に満ちた陶の児童がますます増えていくことを目指して、更なる取り組みを続けていきたい。